

西田哲学の「場所」と高神覚昇

——野崎廣義と共に——

坂 本 慎 一

はじめに

筆者は『比較思想研究』第四六号で、真言宗智山派総本山・智積院の境内にかつてあった智山大学について取り上げ、西田幾多郎が足掛け一〇年通って教鞭をとった事実を指摘した。今回は、西田が智山大学で教えた高神覚昇を論じる。高神が智山大学で特に親炙したのが、西田の弟子の野崎廣義だった。

本稿は、中期以降の西田の最重要概念である「場所」が、高神に深く関係した思想であるという仮説を提示する。

一 野崎廣義と高神覚昇の略歴

野崎の略歴は野崎三郎「亡兄の略年譜に代へて」(新野崎二二〇(二二四)に詳しい。^① 明治二二(一八八九)年四月八日、富山県射水郡七美村生まれ。明治三九(一九〇六)年九月、第四高等学校に入学して西田幾多郎に教わる。

明治四二(一九〇九)年九月東京帝国大学独法科に進学するが、西田が京都帝国大学に着任したと聞き、明治四三(一九一〇)年九月京都帝国大学文科大学に転学し、再び西田に師事した(新野崎二二七)。大正二(一九一三)年七月に卒業し、大正三(一九一四)年九月、智山大学講師に迎えられ、西洋哲学史と論理学の講義をした(新野崎二二二)。生前はライブニッツの「モナドには窓がない」にちなんだ「無窓」を号とする。大正六(一九一七)年六月一七日、心臓発作で突然死した。享年二八。

大正九(一九二〇)年七月、私家版の遺稿集『無窓遺稿』が小笠原秀實によって作成される。後年、務台理作と高坂正顕が再編集し、昭和一七(一九四二)年九月『懺悔としての哲学』(弘文堂書房)として出版された。西田は跋で「野崎君の死は余に取っては自己のいくらか奪ひ去られたやうに思はれ、言ひあらはすことのできない一種の寂しさを感じざるを得ない」(旧野崎・跋三、新野崎一八五、西田二三―二〇三)と述べた。

高神覺昇は明治二七（一八九四）年一〇月二七日、愛知県海部郡市江村出身。二歳で三重県鈴鹿市の林光寺（新義真言宗智山派）住職・高神覺明の養子となる^③。一四歳で得度を受け、長じて智山大学に入学し、谷本富^④、西田、野崎に師事する。大正五（一九一六）年三月に卒業後、大谷大学で西田と佐々木月樵に学ぶ。東大寺に留学して佐伯定胤に学び、大正九（一九二〇）年四月、智山大学助教授に就任した（昭和三（一九二八）年四月教授）。高神は、野崎の思想を主要テーマとした『価値生活の体験』（後述）を大正一一（一九二二）年、谷本と西田の序文で出版。その後も『仏教序説』（一九二四年）、『密教概論』（一九三〇年）などを世に送る。

昭和九（一九三四）年四月末から二週間、ラジオで全国放送した「般若心経講義」は反響を呼び、友松圓諦と共に「全日本真理運動」を起こした。昭和一七（一九四二）年真言文化協会理事長に就任。昭和二三（一九四七）年糖尿病になり失明した。昭和二三（一九四八）年二月二六日示寂。享年五三。

高神は晩年まで自宅を「無窓庵」、主宰する私塾を「無窓塾」と号し、野崎の思想を継承しようとした。野崎亡き後、西田にあって高神は特別な存在であった可能性がある。

二 共通して三者が追った問題

1 高神覺昇『価値生活の体験』

高神覺昇が二七歳の時に出版した『価値生活の体験』（一九三三年）は、初の本格的な著作であり、谷本と西田が序文を寄せた。西田の序文は新版の『西田幾多郎全集』にも採録されず、西田と

高神の関係は注目されていない。

高神は自序で「二」より「六」までは各々題は異っているが、内面的に深い関係があるものであるから、読者はそのつもりでよまれない」（高神一一一三）としており、最も重要なのは第六章「俺は俺だの哲学」であると解釈できる。

2 「我は我なり」「甲は甲なり」の問題

初期西田、野崎、高神は同じ問題を追っていた。まず「我は我なり」(I am I) について、西田は次のように言う。

我が我の同一を知る、知る我と知られる我と同一である、斯く自覚することが我の本質であり、我の存在理由であって、此の如き一々の自覚作用が我に於て事実であり、我の歴史である、我は我を反省することによって発展するのである。（西田二一〇八）

同様に、野崎は次のように言う。

（哲学は）実は我自身の批評を目的としてゐるものである、即ち批評するものも批評されるものも我である。（旧野崎八）野崎を紹介して高神は「故人（＝野崎）が最後に到達したる自覚の天地は、これ実に『俺は俺』の体験であった。げにこの驚くべき宣言こそ、やがてこれ哲学の最後の使命を物語るものである」（高神一一八九）と述べる。高神自身は次の様に述べた。

自己の上に一切衆生を見、一切衆生の上に自己の姿を認めたる自尊の自覚は、まさしくこれ「俺は俺だ」の体験ではないか。（高神一一九〇）

「俺は俺だ」を仏教に引き付けたことは後に重要な鍵となる。

さらに「甲は甲なり」「AはAである」も三者が考察した問題であった。代表的な発言を列記すると次の通りである。

普通には「甲は甲である」といふことは単に論理形式と考へられて居るのであるが、此の如き形式の意味も我々に直接な意識発展の体験を離れて理解することは出来ぬ。(西田二一七二)

「AはAである」といふ自同律に就て観ると、普通主語のAと客語のAとは内容に於てもちがった所のないものであるとされているのであるが、哲学的思惟の上では始めのAが後のAに発展するものと考へ、内容即ち意味の開展があるものとするのである。(旧野崎一九八〇一九九、新野崎三八)

まことに俺は俺である。それは丁度AはAであるという命題の如く、私どもにとつては説明を要せない自明の理である。しかもこの自明の真理であるこの一個の命題は、私どもの容易に説明できぬふかい意味を有っているものである。(高神一八九)

その他「赤は赤い」も、三者は共通して取り上げた。⁽⁶⁾

主語の「我」と述語の「我」はどのような関係か、大正三(一九二四)年以前の三者の言説を断片的に列挙すると、西田は、我が我を「包含」する(西田一一〇二)「感得する」(西田一一八九)「自己の中に自己を写す」(西田二一九七)「発展していく」(西田二二八七)、野崎は「凡夫が超人」となる(新野崎二二)「不可思議の世界の」扉に手を掛けた(新野崎一八)「全称的の力でもって」現はれ来る(新野崎一九)、高神は「見出さるる」(高

神一七四)「即したる」(高神一八二)「至らんとする」(高神一三三七)と述べる。要するに三者とも決定的な結論に至っていない。「悪戦苦闘のドッキュメント」(西田二二二)は、三者に共通していたと言える。

三 「仏に於て自己を見出す」と「場所」

高神は大正三(一九二四)年一月「仏教序説」を刊行した(序文は九月)。成仏について、次の様に説明する。

本當の自己、本来の面目を見出すことによつて、まさしく成仏することと、阿弥陀仏の攝取不捨の本願力に乘托して、極樂浄土に往生するということと、一応は非常に異つたものの様に考えられるが、しかし仔細に考えてみると、これはつまり同一のものを異つた方面より眺めたるものに外ならない。何故かというに聖道教はつまり自己において仏を見出すことであり、浄土教は仏に於て自己を見出すことである。結局兩者ひとしく自己と仏を同一世界に於て眺めんとするものにすぎない。今試みに図によつてこれを示してみるとこうなると思う。(高神九二二六八)

この図が、図1、2である。図2、聖道教の「自己において」の「於て」は自己を「中心として」仏を見出すという意味であろう。図1、浄土教の「仏に於て自己を見出す」の「於て」は西田の「場所」と同様である。西田は「於である場所」といふ如きもの(西田四二二八)とか「有るものは何かに於てであると考へざるを得ない」(西田四二二五)と述べる。

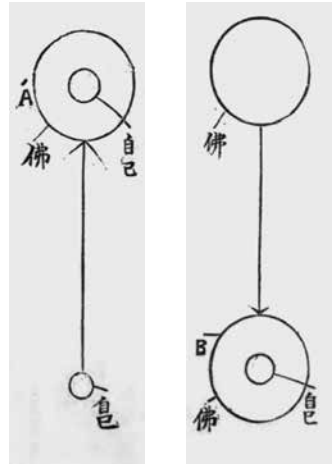


図1 浄土教の成仏 図2 聖道教の成仏
(高神 9-268~269)『仏教序説』(1924 年)

の『哲学研究』第一〇三号（京都哲学会）一〇八頁、つまり次の箇所というのが通説である。

私は真の自覚は自分の中に於て自分を知るといふことであると思ふ。単に主と客と一と云へば、所謂反省以前の直観といふ如きものとも考へ得るであらう、自覚の意識の成立するには『自分に於て』といふことが附加せられねばならぬ。知る我と、知られる我と、我が我を知る場所とが一つであることが自覚である。（西田四—一二七）

同じ問題を追っていた西田と高神は、大正二三（一九二四）年九月頃ほぼ同時に、自己が「於て」ある何かについて、初めて言及したのである。

「場所」の着想を得て、西田は「我は我なり」の問題に一定の解決を得た。まず「私が私であるといふ自覚は既に場所の意義を有

西田が初めて「場所」を特別な意味で述べたのは、大正一三（一九二四）年一〇月一日発行は、大正一三（一九二四）年一〇月一日発行

する。私が私に於てあることを意味するのである」（西田五—六二）と主張した。さらに一般化され、「個物的なるものが考へられるには、すべての個物を包み之を限定する一般者といふものがなければならぬ。私が超越的述語面とか場所とかいふのは、かゝるものを意味して居るのである」（西田五—四二二）と考えるようになった。「甲は甲である」は、周知の様に「場所」の着想から、「述語となつて主語とならないものを考へ得る」（西田五—三五）と展開された。

四 胎藏曼荼羅と「場所」

西田の「場所」とよく似た高神の「仏」とは何か。これは大悲胎藏生曼荼羅（胎藏曼荼羅）をミニマリズムのに簡略化したものと考えられる。

高神は「仏に於て自己を見出す」について、『真理への思慕』（一九二六年）で再論し、『あるもの』としての自己の上に、『あるべきもの』としての自己——を小我、仮我といえ、一は自我、真我といわれるべきもの——を見出さねばならぬ（高神二—一八九）とし、「宇宙」が「大我」（高神二—二四四）であるとす。『密教概論』（一九三〇年）では、「大にしては宇宙、小にしてはわれら個人、それはそのまま金胎両部の曼荼羅であると同時に、理智不二の法身大日如来であるのである」（高神五—五五）と述べる。「仏に於て自己を見出す」は、両部の曼荼羅が該当するが、大日如来が中央だけに描かれている胎藏曼荼羅の方が理解しやすい。近代真言宗の特徴である「我即大日」（高神一—二二二）を想起す

れば、中央に我、宇宙全体を仏と解釈できる。

西田の「場所」が真言宗の曼荼羅と類似することは、上田閑照が次の様に指摘していた。

曼荼羅で表されるものは私たちが存在する本当の場所であるということが言えると思います。そして、場所にあることが私たちのあり方ですから、曼荼羅が本当の場所だということとは、そこに直ちに私たちの本当のあり方が表されているということです。それは人間のいわゆる深層心理の象徴的表現というようなことではなく、人間的ではないところに通じて初めて本当の人間であるようなあり方の表現であり、同時に宇宙の真実相が表されている、そういうものだということです。

私たちの人間としてのあり方は西田哲学の言葉で言えば『場所的自己』ですが、……本当の場所が曼荼羅として開顕し、本当の場所に開かれることによって本当の自分になる。したがってまたその本当の自分が曼荼羅で示される、そういうように受け取ることができるのではないかと思います。⁸⁾

我々は、上田のこの指摘をもっと重視すべきである。

高神は『密教概論』（一九三〇年）で、胎藏曼荼羅を図3の様に簡略化した。高神は「現図は左右三重、前後四重の組織であるに對し、經所説の曼荼羅は左右前後共に各三重である」（高神五一七四）と述べ、中央の八葉院を数えず、左右が三重構造、上下（前後）が四重構造になっていることに注視する。その理由について、権田雷斧『曼荼羅通解』（丙午出版社、一九一六年）を



図3 胎藏曼荼羅（高神5-168）

踏襲した（高神五一八五）。

権田は即身成仏へ至る過程を、外院（一番外側）から中央の八葉院への推移として読む（真言宗選書一三―一三八―四二）。一般的には左右から中央へ至る三段階であり、周囲に善知識がいない等、修行の段階が一段多くなつて四段階になる個別の場合を上下（前後）で示したとする。これは権田独特の解釈と言つてよい。⁹⁾

これを踏まえたうえで、西田『哲学論文集第二』（一九三五年）の図4を見たい。

西田は「これが私の弁証法的一般者といふものである」（西田八―二二―）と述べる。別の所で「真の弁証法的一般者の限定と考へられるものは、……場所的限定の意味を有つたものでなければならぬ」（西田七―一四九）と言つており、この図は「場所」を

発展させたものと解釈できる。「無限大の円」(西田六一八八)を図示するため、一番外側が点線で描かれていていると考えられる。

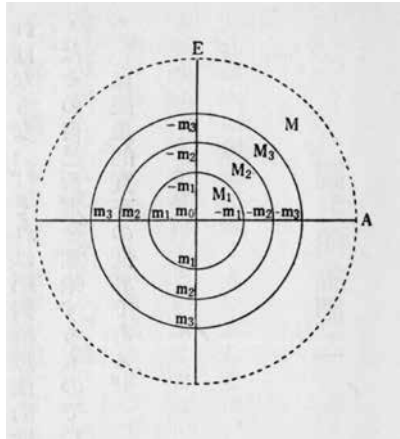


図4 弁証法的一般者 (西田8-221)

西田はEが個物的限定、Aが一般的限定としており、「特殊者Bx」(西田八一二四九)という概念も示す。これはヘーゲル『哲学入門』『小論理学』等からの借用で、それぞれ、Einzelheit, Allgemeinheit, Besonderheitと思われる。

高神による胎藏曼荼羅の簡略図と比較すると、四角と円という相違はあるが、次の特徴が一致する。

- ① 平面で無限大の大きさ(曼荼羅は宇宙全体を平面で示す)
- ② 基本的に三重構造(中央も数えるなら四重)
- ③ 縦が個別(E)、横が一般(A)

西田の図4は、高神が説明する胎藏曼荼羅を原型とし、要素を記号化した可能性が推定される。この推定が正しければ、南方熊楠の「南方曼荼羅」に倣って、これは「西田曼荼羅」と呼ぶこと

ができる。

Mxが「場所」・「仏」とすると、mxは「行為的自己mx」(西田八一二三五)であるから、高神の「仏に於て自己を見出す」は「Mxに於てmxを見出す」と言える。西田は「Mxに於てあるmx」(西田八一三三三)と述べる。

先に記したように、高神は仏も自己も大日如来であると述べた。MについてはMedium(西田一四一八九)という説明もあるが、「絶対者M」(西田八一二五七)という表現もあるので、Mahāvairocana(大日如来)と読んだ方が意味は通る様である。

権田は、一切の仏教は密教によらなければ十分な解釈はできず、一切の仏教の総体、真髄は曼荼羅であると述べ、曼荼羅の思想は「西洋の哲学に超出するところある」(真言宗選書三一一四)と主張する。「今日の世界史的立場に立つて、仏教から新らしき時代へ貢献すべきものがないのであらうか」(西田二一四六二)と考える西田は、権田の立場を発展させたと解釈できる。

五 他の類似する思想

以下、傍証として両者の他の類似性も指摘したい。高神『仏教序説』(一九二四年)は、木村泰賢『解脱への道』(甲子社書房、一九二四年)に記載された図5、6を紹介している。この図について高神は「自我の発展と拡充につき、これを内面的と外面的との二方向より観察し、自我は一方には段々と内面的に後退すると同時に、他方には漸次外面的に展開するものである」(高神九一三七七)と説明する。図5は常識的自我(身体)、生理的自我

(呼吸)、心理的自我(精神)、真我への沈潜を意味し、それが同時に図6では身体、家族、国家、全人類、宇宙へ広がることを示す。これらの図を念頭におき、次の中期西田の言葉を見たい。

我々の自覚的立場を深めて行くに従って、所謂自然界以上の対象界を見ることが出来る。(西田四—三〇九)

自分の内を知るといふことから、自分の外のものを知るといふことに及ぶのである。(西田四—二二五)

内的事実即外的事実、外的事実即内的事実(西田六—五) 直観的自己

の意味に於て 我々の自己は深められ広げられて行くのである、社会的自己といふ如きものは斯くして考へられるのである。(西田六一〇七)

また図5の四重の「自我」を無限に円が重なる図へ拡張すれば、次の言葉と重なる。

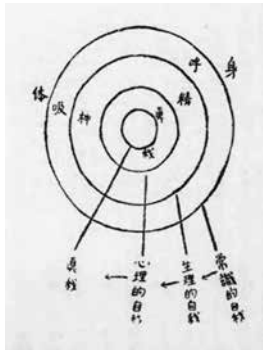


図5 (高神 9-376) 木村泰賢『解脱への道』95頁

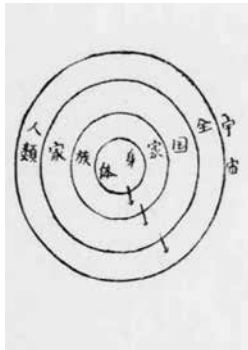


図6 (高神 9-377) 『解脱への道』97頁

無限に自己の中に自己を見て行くのである、かゝる意味に於ては自覚は無限の過程とも考へることが出来る。(西田五—三五五)

中期西田は、図5、6を時々念頭においていた可能性を想起できる。後に西田は「世界の進展は円の中に円を描くと考へられる」(西田七—二〇八)と述べた。

高神『仏教序説』(一九二四年)には、図7も掲載されている。高神の言う発心、修行、成仏の過程が、西田の図8の自由意志、行為的一般者、意味了解と重なりと見える。つまり出発点として最初に悟りを開きたいという発心⇒自由意志があり、修行⇒行為を経て、成仏⇒意味了解へ至ると捉えられ、図8は図7の発展形と考えられる。

他にも両者は「永遠の今」(西田六—二三)と「永遠なる今」(高

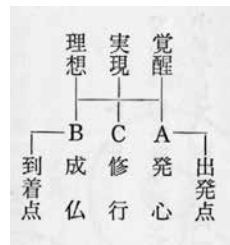


図7 (高神 9-270) 『仏教序説』(1924年)

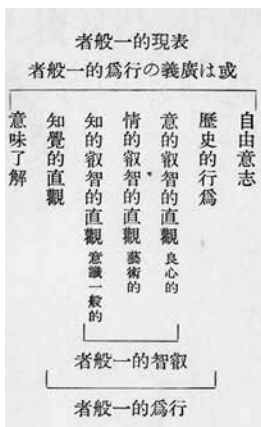


図8 (西田 5-481、1930年)

神二—六九)、弁証法(西田六一八)と止揚(高神二—二七〇)、絶対無(西田五—一七七)と絶対空(高神二—二八三)、

「すべてがそこからこへ」(西田九—三三三)と「一切は仏に出でて、又た一切は仏に還る」(高神五—一〇二)等が類似する。

終わりに

空海は「密藏は深玄にして翰墨に載せ難し。更に図画を仮つて悟らざるに開示す」(御請来目録)と述べる。高神は同様に「宗教的真理の世界をば未悟のものに開示するには、どうしても図絵などの象徴によつてこれを芸術的に表現するより外に方法はないのである」(高神五—一四六)と言う。

初期西田は「遂に何等の新しい思想も解決も得なかった」(西田二—一一)と述べ、一度は行き詰まった。しかし高神を通じて密教からイメージ的思考を手に入れ、「場所的に云はば平面的に考へる」(西田五—四五三)ことで新たな展開を可能にした。「場所」とは曼荼羅に由来する思想である。これが本稿の提示する仮説である。

※本稿で利用した全集、選集、遺稿集は次の通りである。

『西田幾多郎全集』(岩波書店、一九六五—一九六六年)

小笠原秀實編集兼発行『無念遺稿』(一九二〇年)(旧野崎)

野崎廣義『懺悔としての哲学』(弘文堂書房、一九四二年)(新野崎)

『高神覚昇選集』(歴史図書社、一九七七—一九七八年)

『真言宗選書』(同朋舎出版、一九八六年)

(1) その他、「本学教授文学士・故野崎廣義先生略伝」『智山学報』第五号、四〇—四二頁の間の頁も参照。

(2) 『智山学報』第三号(興風会、一九一六年)、三四頁では野崎は「講師」であり、注一の「略伝」では「教授」である。

(3) 高神覚昇の事績は、『高神覚昇選集』第一〇巻巻末の「略年譜」二〇一—二二頁を参照した。しかしこの「略年譜」は誤植が多く、随時他の情報も参照した。

(4) 谷本は京都帝国大学退任後、智山大学顧問兼講師となつてその運営に尽力した。前掲『智山学報』第三号、二二—二四頁参照。

(5) 坂本慎一『戦前のラジオ放送と松下幸之助』(PHP研究所、二〇一一年)二二〇—二二二頁で、友松圓諦のラジオ放送と真理運動の発端について解説した。

(6) 「赤は赤い」の典拠だけ列記すると、(西田二—一九六)(西田一五—二一七)(西田一七—三八四)(旧野崎二—三)(旧野崎二四七、新野崎九〇—九二)(高神—一九六—一九七)。

(7) 大橋良介『西田幾多郎——本当の日本はこれからと存じます——』(ミネルヴァ書房、二〇一三年)二二頁、藤田正勝『日本哲学史』(昭和堂、二〇一八年)二二八頁。

(8) 上田閑照「場所と曼荼羅」『哲学コレクションII 経験と場所』(岩波書店、二〇〇七年)三〇三—三〇四頁。上田閑照の父は真言宗の大僧正・上田天瑞である。上田天瑞『戒律の思想と歴史』(密教文化研究所、一九七六年)序文七—八頁に上田家の紹介がある。

(9) 梶尾祥雲『曼荼羅乃研究』(高野山大学出版部、一九二七年)、石田尚豊『曼荼羅の研究』(東京美術、一九七五年)等、後の代表的な研究は、この解釈を踏襲していない。

(さかもと・しんいち、近現代日本思想史、PHP研究所研究コーディネーター)